

「観光 vs. 自然保護」の二項対立を越えて—エコツーリズムにおけるコンフリクトから

檜本 直樹 (文学研究科 臨床哲学)

0 はじめに

この研究が扱うのは、エコツーリズムの実践を取り巻くコンフリクトである。そして、そうしたコンフリクトに対し、直接/間接を問わず関わる人たちが、コンフリクトを理解し、その軽減に向けて取り組むときに何をどのように考える必要があるのか、またそうした取り組みのなかで「対話」がどういう意味や可能性をもってくるのか、について考えることを目的としている。そのために、前回までの調査研究に引き続き、沖縄本島および八重山地域に赴き、具体的にどのようなコンフリクトがあり、それに対してどのような取り組みがなされているのかを調査し、エコツーリズムの抱える課題や問題について検討を行った。

1 調査の概要

場所：沖縄県八重山地域：石垣島、西表島、竹富島

沖縄本島：東村ほか

期間：平成20年9月8日～10月2日

方法：エコツアーへの参加、関係者への聞き取り、資料収集など

石垣島では〈ふくみみ〉主催のエコツアーに参加すると共に、エコツアーならびにルール作りにむけた石垣島での取り組みなどについて聞き取りを行った。また、西表島では〈パドルラティーク順風〉主催のエコツアーに参加し、西表島におけるエコツアーの現状と問題などについて聞き取りを行った。また沖縄県で進められている「沖縄における環境保全型観光促進事業」に関して、仲間川ワーキンググループに関わっている西表島エコツーリズム協会ならびに関係者に現状と課題について聞き取りを行った。

沖縄本島では東村を主に訪れ、先にあげた「観光促進事業」のもう一つのモデル地域である玉辻山に関して、東村エコツーリズム協会(東村商工会)を訪問し、東村の取り組みや課題などについて聞き取りを行うと共に、協会関係者の案内で玉辻山を視察するエコツアーに参加した。

また、それぞれの地域で、公共施設などを使い、資料収集に努めた。

2 成果の概要

2-1 調査から見えてきたコンフリクト

エコツーリズムとは、環境保全、観光振興、地域振興という3つの要素を満たす観光であり、エコツアーを生み出す仕組みや考え方を指すが、そうした観光を目指す取り組みには多くのコンフリクトが伴っている。現在、沖縄県では、県をあげて環境保全型の観光に取り組んでいるが、先にあげた「観光促進事業」のモデル地域である西表島仲間川において聞かれたのは、大手観光客と地元観光客の対立、行政の対応の消極性、関係者の足並みのそろわなさ、などに対する不満であった。とりわけ印象に残ったのは、観光事業に対して地元/地域が主体性を持っていないことの問題を指摘する声であった。この点に対して対照的だったのは、もう一つのモデル地域、玉辻山のある沖縄本島、東村の取り組みであった。東村は村民が中心となりエコツーリズムを推進しており、全国的に見ても「地域おこし」の先進地となっている。その取り組みは沖縄の他地域のそれと大きく異なっている点で非常に興味深かったが、聞き取りにおいては、村外のんびりとの関係、隣接する村との行政間関係、エコツアーの進め方などをめぐって見解の相違や対立が見てとれた。

その他の地域や取り組みにおいても、マクロなものからミクロなものまでを含め、多くのコンフリクト、あ

るいはその可能性があることが調査によって明らかになった。

2-2 エコツーリズムをめぐって考える必要のあること

では、なぜこのようなコンフリクトが生じるのか。そしてエコツーリズムに関わる人たちがコンフリクトを理解し、軽減するという時に、何を明らかにしなければならないのだろうか。以下に、簡単にポイントのみ示したい。

●エコツーリズムとは何か？

エコツーリズム／エコツアーという言葉がそもそも曖昧であることとも関係するが、関係者間で言葉の認識および使い方において齟齬がみられる。それらが環境保全のための活動や地域づくり、活性化の手段としてなど、立場の違いによってさまざまに用いられ、評価が下されている。エコツーリズムは、あくまで考え方であり、エコツアーも、どういう考え方に基づいてなされるものか、その内実が明らかにされなければならない。さまざまな取り組みは、その点を理解し、推進していく必要があると言えるだろう。

●保全すべき環境とは何か？

エコツーリズム同様、環境という言葉も曖昧であり、立場の違いによってさまざまな使い方がなされている。エコツアー関係者が環境という際に念頭に置かれているのは、多くの場合「自然環境」である。しかし、そうした環境は、人びとの生活や経済システムなどと切り離されてどこかにあるわけではない。保全すべき環境とはいかなるものなのかを、まずは明らかにする必要があるだろう。

●地域の主体性：地域／地元を優先する根拠は何か？

従来の観光は、本土にある大手ツアーリスト主導で行われ、都市が潤い、地方が疲弊するという構図があり、それゆえ、今後は観光に対して地域が主体性をもつことが必要である。その地域に住む人びとの犠牲の上に成り立つ、観光や環境保全というのは本末転倒である。ただ、観光促進か環境保全かという二項対立にならないためにも地域という視点から考えることは望ましいと考えられるが、その根拠は何に求められるのか。経済的利益に焦点があたるかぎり、地域振興か環境保全かという対立軸に移るだけで、経済か環境かという軸は何も変わっていないのではないか。地域の自立とは何か、そして何に主体性をもつということなのか。孤立や依存ではない形において、観光における地域の自立性とは何かについて考えていく必要があるだろう。

●関係者は誰か？

各地でエコツーリズムをめぐって、その問題や取り組みについて議論がなされている。ただ、その議論のなかに観光客が加わることは（ほとんど）ないように思われる。確かに、観光客はその土地に一定期間しか滞在しないので、関係者として話し合いの場に参加する／させるというのは現実味がない。ただ、観光地はその地域のものでありながらも、観光客のものでもある。それゆえ「私たち」の問題として、観光客を問題の当事者として巻き込む形でエコツーリズムという仕組みを考える必要があるだろう。

おわりに：今後に向けて

エコツーリズム、つまり観光促進も環境保全も、からはじまる問題は、エコツーリズムをどうやって普及させ、活用するのかわけだけではうまくいかない問題である。それにはさまざまな立場や利害が複雑に絡み合っており、多くの感情的齟齬、誤解、みなし等が伴っている。それゆえ、そうした問題が「人と人との関係」にあることに立ち返り、関係者が対話によって、問題の足下から丁寧に考え、そこにあるもつれを一つ一つ紐解いていくしかないといえる。ただ、対話の必要性を説くだけでは、何を言ったことにもならず、今後は、先に取りあげたエコツーリズムを取り巻く問題を、哲学・倫理学からどのように考えられるのか、またコンフリクトを引き受け、対話するような取り組みとしてどのようなものがあるのか、について引き続き考えていきたい。